海峡植民地と第二司法憲章

Dr Alexander Ressos, TEP
Attorney-at-Law (Switzerland and Germany),
Solicitor (England & Wales and Hong Kong)
Of Counsel, KGP Legal LLC
alexander.ressos@kgplegal.com.sg
www.ressos.com.sg

1826年の海峡植民地

1826年、東インド会社は海峡に有する三つの領土、すなわちペナン、マラッカ、シンガポールを単一の行政単位に統合しました。これが海峡植民地（Straits Settlements）です。[1]政庁は当初、最も古い植民地であるペナンのジョージタウンに置かれていました。1832年、交易量と人口でペナンを上回るようになっていたシンガポールへ移されます。[2]この移転によって、シンガポールはこの地域における英国の権力と商業の中心としての地位を確かなものにしました。

東インド会社の統治下で、海峡植民地はベンガル管区の一部とされ、カルカッタから統治されていました。また、インドからの受刑者を送る流刑地としての役割も担っていました。受刑者たちは、シンガポールの道路や公共建築物を含む公共事業の労働力の多くを提供しました。[3]海峡植民地はカルカッタにとってさほど重要な存在ではありませんでした。そのためカルカッタへの従属はシンガポールの商人たちの不満の種となり、彼らは

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

ロンドンによる直接統治を求める運動を展開します。1867年4月1日、海峡植民地は植民地省に移管され、直轄植民地となりました。この変化についてはパートBで検討します。[4]

ペナンの第一司法憲章と法の問題

海峡植民地でどの法が適用されるのかという問題は、まずペナンで生じました。1807年に付与された第一司法憲章（First Charter of Justice）は、当時プリンス・オブ・ウェールズ島と呼ばれていたペナンに裁判所を設置しました。[5]一方、建設当時のシンガポールには、これに相当する法的文書がありませんでした。最初の数年間、司法は駐在官（Resident）によって運営され、1823年からは商人社会から選ばれた治安判事がこれを補佐しました。しかし、その根拠となる規則の法的基盤は不確かなものでした。とりわけ重大犯罪は難題でした。駐在官には、それを裁く明確な権限がなかったからです。

正規の裁判所がないことを痛感していたのは商人たちでした。彼らには、契約を執行し債権を回収するための場が必要だったのです。数千人の住民を抱え、広範な信用取引関係が築かれつつある成長途上の港が、駐在官による非公式な司法にいつまでも頼り続けることはできませんでした。解決策となったのは、ペナンの裁判所の管轄を海峡植民地全体に拡大することでした。

1826年11月27日の第二司法憲章

第二司法憲章（Second Charter of Justice）は1826年11月27日に英国王室によって発布され、プリンス・オブ・ウェールズ島・シンガポール・マラッカ司法裁判所（Court of Judicature）を設立しました。[6]この裁判所は、総督（Governor）または長官（President）と、裁判所が開廷される地の駐在参事官（Resident Councillor）の2名を裁判官とし、これに職業裁判官であるレコーダー（Recorder）が加わる構成でした。[7]行政官と職業裁判官を組み

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

合わせるこの方式は当時の植民地の慣行を反映したものでしたが、摩擦の原因ともなりました。レコーダーは、法律家ではない同僚裁判官としばしば対立したのです。

この憲章は、四つの要素からなるひな形として読むことができます。すなわち、裁判所の設置と構成、管轄権、適用法、そして法律実務家の規律です。[8]裁判所には、イングランドの上位裁判所をモデルとした管轄権が与えられ、民事、刑事および教会関係の事件を扱いました。1837年には海事管轄権が追加されています。[9]2026年、シンガポール最高裁判所は、同国の司法制度の礎となった瞬間として、この憲章の200周年を記念しました。[10]

レコーダーと裁判所の草創期

初代レコーダーは、憲章の中で指名されたサー・ジョン・トーマス・クラリッジでした。[11]その在任期間は、裁判所の巡回をめぐるロバート・フラートン総督との対立に彩られていました。東インド会社はクラリッジに年俸4,000ポンドと巡回費用を支払うことに合意していましたが、そのことを現地政府に明確に伝えていませんでした。現地政府は彼の旅費の支払いを拒否します。そのため1828年1月、クラリッジはシンガポールとマラッカへの巡回を拒みました。[12]裁判所がシンガポールで初めて開廷したのは1828年のことです。[13]

費用をめぐる争いは些細なことに見えるかもしれません。しかしそこには、植民地司法に繰り返し現れるテーマが表れています。裁判所の実効性は、与えられる資源と独立性によって決まるということです。クラリッジはのちに召還されました。行政と司法の関係は、その後数十年にわたり海峡植民地で争点であり続けました。国際的に高い評価を受ける今日のシンガポールの司法は、ささやかな始まりから続く長い発展の到達点に立っているのです。

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

弁護士と実務の規律

憲章のひな形の第四の要素は、法曹に関するものでした。憲章は裁判所に対し、アドボケイト（advocate）とアトーニー（attorney）を同裁判所での実務に認め、その行為を規律する権限を与えました。[14]最初の数十年間、海峡植民地の有資格法律家の数はごくわずかでした。そのため多くの訴訟当事者は本人で出廷するか、正式な訓練をほとんど受けていない代理人に頼っていました。商業社会の成長に伴い、契約書を起草し、訴訟を遂行し、ますます複雑化する会社法、海運法、保険法について助言できる職業法律家への需要が生まれました。

シンガポールの法曹は、同じ実務家が法廷では弁論を行うアドボケイトとして、また依頼者に助言するソリシターとして活動する一元化された職業として発展しました。この特徴は、「シンガポール最高裁判所のアドボケイト・アンド・ソリシター（advocate and solicitor of the Supreme Court of Singapore）」という今日の称号にも残っています。同じ法律事務所が法廷の内外で商人のニーズに応える小規模な商業法域には、一元化された法曹がよく合っていました。こうした始まりから成長した法律事務所や、のちにシンガポールに進出した外国法律事務所については、パートJで検討します。

その後の憲章と最高裁判所

1855年8月12日に付与された第三司法憲章（Third Charter of Justice）は、シンガポールにおける事件数の増加に対応して、司法裁判所を二つの部に再編しました。[15]植民地省への移管後、1868年の最高裁判所令（Supreme Court Ordinance）は司法裁判所を廃止し、首席裁判官（Chief Justice）を長とする海峡植民地最高裁判所に置き換えました。1873年の裁判所令（Courts Ordinance）は、最高裁判所に控訴院として開廷する管轄権を与えました。[16]こうして各憲章は、明示的に廃止されることなく、植民地の立法によって取って代わられたのです。[17]

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

独立後、1969年の最高裁判所法（Supreme Court of Judicature Act 1969）によってシンガポール最高裁判所が再設置されました。これは高等法院、控訴院、刑事控訴院で構成されるものです。[18]ロンドンの枢密院司法委員会への上訴は1994年に廃止され、それ以降は控訴院がシンガポールの最終審裁判所となっています。[19]2015年に高等法院の一部として設立されたシンガポール国際商事裁判所（SICC）については、パートFで検討します。

注

1. Wikipedia, “Straits Settlements”（2026年9月最終閲覧）：“Originally established in 1826 as part of the territories controlled by the British East India Company”。 ↩
2. Wikipedia, “Straits Settlements”（2026年9月最終閲覧）：“Their capital was moved from George Town, the capital of Penang, to Singapore in 1832”。 ↩
3. Wikipedia, “Straits Settlements”（2026年9月最終閲覧）：同植民地は“a Division within Bengal Presidency”として運営され、各植民地は流刑施設として利用されていた。 ↩
4. Wikipedia, “Straits Settlements”（2026年9月最終閲覧）：“On 1 April 1867, the Straits Settlements were transferred to the British Colonial Office and became a Crown colony”。 ↩
5. Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter: The Making & Unmaking of a Template for Justice”, *Singapore Law Gazette*, 2026年4月15日：第一司法憲章は1807年にペナンのために発布された。 ↩
6. Supreme Court of Singapore, “Celebrating 200 years of upholding the Rule of Law”, judiciary.gov.sg（2026年9月最終閲覧）：1826年11月27日に発布された第二司法憲章は「established the Court of Judicature of Penang, Singapore and Malacca」。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

7. Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter”, *Singapore Law Gazette*, 2026年4月15日、憲章を引用：裁判所は「the Governor or President and the Resident Counsellor … of the Station where the Court shall be held, as two of the Judges … and … the Recorder」で構成された。 ↩
8. Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter”, *Singapore Law Gazette*, 2026年4月15日、憲章のひな形の「four pillars」（裁判所の設置と構成、管轄の範囲、適用法、法律実務家の規律）について。 ↩
9. Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter”, *Singapore Law Gazette*, 2026年4月15日：海事管轄権は1837年に同裁判所に付与された。 ↩
10. Supreme Court of Singapore, “Celebrating 200 years of upholding the Rule of Law”, judiciary.gov.sg（2026年9月最終閲覧）。 ↩
11. Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter of Justice and the First Recorder (Part 1)”, *Singapore Law Gazette*, 2023年3月：初代レコーダーは憲章で指名されたサー・ジョン・トーマス・クラリッジ（1792–1868年）であった。 ↩
12. Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter of Justice and the First Recorder (Part 1)”, *Singapore Law Gazette*, 2023年3月、フラートン総督との争い、年俸4,000ポンドと巡回費用、1828年1月のクラリッジによる巡回拒否について。 ↩
13. Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter”, *Singapore Law Gazette*, 2026年4月15日：司法裁判所がシンガポールで初めて開廷したのは1828年である。 ↩
14. 第二司法憲章に基づき司法裁判所がアドボケイトおよびアトーニーを認め、規律する権限については、Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter”, *Singapore Law Gazette*, 2026年4月15日、およびシンガポール法曹の歴史について Kevin Y.L. Tan (ed.), *The Singapore Legal System*, 2nd edition, Singapore, Singapore University Press, 1999 参照。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

15. Supreme Court of Singapore, “Celebrating 200 years of upholding the Rule of Law”, judiciary.gov.sg（2026年9月最終閲覧）：第三司法憲章は1855年8月12日に付与され、司法裁判所を二つの部に再編した。 ↩
16. Supreme Court of Singapore, “Celebrating 200 years of upholding the Rule of Law”, judiciary.gov.sg（2026年9月最終閲覧）、Judicial Duties Act 1867、Supreme Court Ordinance 1868 および Courts Ordinance 1873 について。 ↩
17. Kevin Y.L. Tan, “The Second Charter”, *Singapore Law Gazette*, 2026年4月15日：第二司法憲章の効力は「not through explicit repeal but through gradual supersession by new colonial legislation, particularly the 1868 Supreme Court Ordinance」によって終了した。 ↩
18. Supreme Court of Singapore, “Celebrating 200 years of upholding the Rule of Law”, judiciary.gov.sg（2026年9月最終閲覧）：Supreme Court of Judicature Act 1969 は「re-established the Supreme Court of Singapore, comprising the High Court, the Court of Appeal and the Court of Criminal Appeal」。 ↩
19. 枢密院への上訴は、Judicial Committee (Repeal) Act 1994 により1994年4月8日付で廃止された。 ↩

Disclaimer

This article is provided for general information only. It is based on publicly available sources as at its date of publication. These sources have not been independently verified against licences, regulatory registers or the records of the entities concerned. It is not legal, tax, financial or investment advice. Nor is it a recommendation to invest in, transact with or use the services of any entity mentioned. Law and regulation change frequently, so the content may be incomplete or outdated. To the fullest extent permitted by law, Dr Alexander Ressos and the publisher of SingaporeIQ exclude all liability for loss or damage arising from the use of or reliance on this article. Readers should obtain advice on their specific circumstances before acting or refraining from action.

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

Names and trademarks of the entities discussed belong to their owners and are used for identification only. Their mention implies no endorsement, affiliation or allegation of wrongdoing. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. Corrections and updates: contact@ressos.com.

© 2026 Dr Alexander Ressos. This article may be quoted with attribution to SingaporeIQ (SingaporeIQ.com). Reproduction in full and any commercial use require prior written consent. The Legal Terms at https://singaporeiq.com/legal-terms apply.

Author contact: Dr Alexander Ressos, TEP · contact@ressos.com

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.